

第1回「日本語大賞」

テーマ 「人と人をつなぐ日本語」

大学生・専門学校生・一般の部 優秀賞 受賞作品

「相聞歌」

東京都

国際基督教大学 1年

結城 明姫

結城 明姫

「ひいばばが もうすぐ百かと思う日に おめめじいっと あきをみている」(明姫 九歳)

短歌とは言葉の陶芸だ。私は、三十一音に日本語の精髓を込める。

興奮を、優しさを、寂しさを、そして憧憬を、時には無骨に、時には繊細に言葉という檻の中で形作っていく。

私に初めて短歌という言葉の芸術を贈ってくれたのは、明治生まれの曾祖母結城姫路だった。歌名をみち子という。

「いのち生きて もうすぐ百かと思ふ日に ひまごのかほが 胸に広がる」(結城みち子 冒頭の一首は、この曾祖母への返歌だ。十歳になろうとしていた私は曾祖母の顔をのぞき込み、桃花のような笑みを浮かべて、その歌を詠んだという。

読み手と受け手、「相」、「聞」く「歌」。人と人をつなぐ「相聞歌」は、古、万葉の昔から、恋するものたちの中に生まれ、親子の絆を紡いで続いてきた。人間の心は不可視だ。時には万言を費やしても理解しあうことができない。あまりにも複雑に絡み合う感情だからこそ、人はそれを短歌という言葉に代え、人に贈るのだ。

「うたう歌 気持ちガラスに 封じこめ 人が詠って 伝わってゆく」(六歳)
私にとって、短歌とは「人とつながり」そのものだ。

花柄の便せんに、透かし入りの和紙に、ティッシュの箱に、チラシの横に、ありとあらゆる場所に曾祖母は短歌を書いた。書き遺していった。たった一人のひ孫である私へと贈られた数えきれぬほどの短歌が、私と曾祖母をつなぐ最高の絆なのだ。

今でも曾祖母の歌集を開けば、十年の昔が色鮮やかによみがえる。

「白雲に 流るる蜻蛉 明日を知らず 知らざる明日に 賭けて 飛べ翔べ」(みち子)
曾祖母は、芍薬のように華やかで柔らかい人だった。一方で、まれに見せるタンポポを思わせる強靭さに、私はあこがれ、なついていた。さびしがりは白寿を目前にした年配の常か、小学校の休み明けに帰京する段になると、捨て犬のような目で去ろうとする私を

見た。九十九歳になっても、豊饒として東京の我が家に遊びに来た。来れば手を取り、歌う「とうりゃんせ」は私の知っているものと少し違った。古くからの美しい言の葉と音律を、薄紅色の唇が奏でていた。その歌詞を今はもう思い出せない。なぜ、どこかに書き留めておかなかったのだろうか。二度と手に入れることのできない、言葉の宝石であったものを。

X線が発見されたのは曾祖母の生まれるほんの四年前。アーク灯の導入や、キュリー婦人のラジウム発見も曾祖母の誕生と重なる。ライト兄弟の初飛行は、彼女が二歳のときの話だ。若山牧水や太田瑞穂……師事した歌人たちの、尽きぬ思い出話は短歌そのものとなって私へと降り注ぎ、そして、私もだいに日常を詠じるようになっていった。

「コップの中 満月の夜 とびはねろ おうちが広がる 青色うちゅう」(五歳)

「ぶくぶくと あわたつお風呂に ひいばが 久しぶりだよ 大安の今日」(六歳)

「妖精よ 明日になれば 今日のこと 水の雫に なってしまいか」(十歳)

「花いちもんめ」や「とうりゃんせ」、「剣道ごっこ」で、よく曾祖母と戯れた。新聞紙を丸めて作った剣は、今は芯のみが残る残骸へと姿を変える。それでも、「おめんっ」「おこてっ」という曾祖母のはしゃいだ声が耳元で聞こえてきそうな気がして、その古びた紙の固まりを私は未だに捨てられずにいる。

「桃色に かがやく者の 面影よ 雲と眠らん 天空の扉」(十四歳)

「春の雨 窓に水の 流星雨 冷たくふれゆく 一瞬の刻」(十一歳)

「だきしめて どんな時でも 波うって 二度とたどれぬ 海までの道」(十五歳)

曾祖母は海が大好きだった。二階から見える海の白波と、潮の香りに満足できなくなる、私を誘って海へ行こうとした。家から数百メートルしか離れていない浜辺だが、いつも途中で曾祖母の足が止まる。疲れて上がらなくなった足に目を落とし、曾祖母は道の草地に座り込んだ。

「スキップが したくて足を 上げたれば 夢はお捨てと 風に言われぬ」(みち子)

お正月には、かわいらしい喧嘩をした。

「ひいばあが おきてきちゃった 悪い子だ お昼寝せんせんしてないくせに」(五歳)

「明姫ちゃんが お昼寝しないよ わるい子だ ゆうべせんぜん寝てないくせに」(みち子)

ならんで雪を見た。

「初雪に 凍ってゆくよ 葉っぱまで 覚めるそばから 砕けゆく過去」(十二歳)

育った故郷の思い出を聞いた。

「ひい婆に 摘んで摘んでよ なるこゆり 昔話の ふるさとの家」（十三歳）
海辺で拾った野良猫を飼った。

「『かぼすのみ…』 うたつくない ねこのミケ まぶしそうに 空を見ている」（七歳）
猫の墓を作った。

「ふとんの中 死んでしまった 明姫のねこ 雲おいかけて 天駟け昇る」（八歳）
幼い私は、曾祖母の歌に触れ、至高の優しさを「聞いた」。石の美しさを聞いた。人の善悪を聞いた。深遠な憂慮を聞いた。生と死の哲学を聞いた。

「おとうさん 生きすぎました しんとろり 夢の中でも あなたは朧」（みち子）

この一首に漂うのは、一世紀を生きたあの女性（ひと）の悲哀か、達観か、哀惜か。この一首に、何人が涙したことだろう。そして、この一首が何人の人生を変えたことだろう。かつて大岡信の「折々のうた」に取り上げられ、茨城文学賞を受けた歌集「しんとろり」を代表する一首である。短歌とはそれを詠んだ人すべてに向けられている手紙でもあるのだ。

ある日、ふと耳にした吟詠。ある朝、新聞にのっていた秀歌。誰が詠んだともしれない、しかし心に残る三十一文字。短い言の葉は、あなたにこそ語りかけている。えり抜かれた一語一語が人の感情と感情をつなぎ、人生と人生をつなぎ、魂と魂を、思い出と思い出を、そして、「人」と「人」をつなぐ。

具象に封じ込められた複雑な情動も、抽象化されていく日々の体験も、日本語という自在な言語に投影されると、言霊すら持って、読み手を揺さぶってゆける。もし、一首が聞き手の人生を変えたとしたら、その生き様こそが、ひとつの形の「返歌」なのだ。

私に和歌の世界を遺してくれた曾祖母は、二千年の冬、この世を去った。死してなお切れぬ絆は、曾祖母に最期の一首を遺させた。

「どんぶりが どんぶりである 悲しみを 噛みしめにつつ みたす雑炊」（みち子）

曾祖母の遺作は、私に何を語りかけてくるのか。寂寥というには力強く、解脱というには足掻いており、哲学とくくるのはあまりにも陳腐だ。その一首は蜃気楼に似て、姿は見えども手につかめない。曾祖母は人生を掛けて、操觚（そうこ）という名の手を差している。私はその手をつかめた時、この一首は再び私と曾祖母をつなぐ橋となる。差し出

すべき私の手は、この歌への返歌は、いったい何であるのか。私は未だ、答えにたどり着いていない。

「ゆきゆけば 涯などあらな 野狐の 振り返りみる 空は夕焼け」(みち子)

「あせらずに進め」と、時を隔てた色紙の字が私の背を押す。

だからこそ、私も歌を返そう。これからも求め続けると。無上の一首への返歌を、曾祖母への架け橋を、人と人をつなぐ短歌という名の芸術を。

「池めぐる 赤白の鯉 どこまでも さがしつづける 道のおわりを」